

ゆめのかたち

50年目を迎え、歴史を胸に新たな一歩へ

見果てない想い「ゆめ」。それは、決断を経て希望という支えとなり、希望を持って前進する者にのみ、「かたち」として見えてくる。

平成23年3月11日の東日本大震災、それに伴う大津波や福島第一原発事故、各地の豪雨災害など日本を揺るがす未曾有の出来事を前に個人の無力さを痛感させられました。しかしながら、地域のコミュニティで互いに助け合いながら力強く復興へと歩みを進める様は、日本国民に大いなる夢と希望を与えました。

終戦直後の焼け野原から、当時の青年世代が立ち上げた組織である青年会議所。その青年会議所運動が唐津の地で産声を上げて半世紀という大きな節目を迎えました。常に日本の在り方を考えきた我々は、今こそ、新たな国難からの復興の為に、未来への希望の灯を絶やすことなく、たくましく実働していかなければなりません。

50年目の節目を迎えた今、我々は、諸先輩方の築いてこられた歴史に感謝し、大切に受け継いでいかなければなりません。そして、過去からの想いを引き継ぐと共に、唐津JCの新たな一面を示すべく、決断していかなければなりません。

我々は先輩方から、広い視野を持ち、人と人との固い絆を育みながら「ゆめ」を描く事を学びました。そしてこれからは、その「ゆめ」をこのまちに暮らす全ての人々と共有し「明るい豊かなからつ」の創造へ向けて前進していきます。

「ゆめ」を「かたち」にするために、我々は「からつらしさ」を守り育て、「まちづくりの出来るひとづくり」運動をさらに展開し、剛毅直諒の心で更なる実働を約束して、新たな一歩を踏み出します。

そこで、40周年時に提唱された「NEXT-創(クリエイト)」を更に発展させ、次の10年への新たな一歩を導くべく4つの活動指針を掲げます。

ゆめのかたち

宣言文

青 少 年

我々はふるさと「からつ」に郷土愛を育む子ども達の夢溢れる未来のために、前進する。

国 際 交 流

我々はふるさと「からつ」の市民一人ひとりが心通う交流を行い民間外交の担い手となるべく、前進する。

会 員

我々はふるさと「からつ」を想い、まちづくりのできるひとづくりをすべく能動的に行動し、前進する。

ま ち づ く り

我々はふるさと「からつ」に、人と人とのつながりを基調とした参画型社会を確立すべく、前進する。

ゆめのかたち

～子ども達の未来へ～

子ども達が身近な人々と共にふるさと「からつ」を愛し、夢を描きながら成長できる環境づくりを行います。

我々唐津JCは50年間、ふるさと「からつ」の発展を考えて運動してきました。その中で、夢溢れる世代である青少年の育成には特に力を注いできました。NEXT-創を発信してから10年間は特に、「地域の子ども達は地域で育てる」という理念のもと、PTCA環境（子どもを育てるための親・教師・地域のコミュニティ）の成熟を念頭に置き、青少年育成事業に取り組んでまいりました。

今の時代、情報技術の発達により、人とのコミュニケーションが希薄な時代になりました。そのような環境においては「友情」「家族愛」「郷土愛」は芽生えません。「からつ」の子ども達には、人と接し、家族と話し、自然の中で遊ぶ大切さを感じてもらいたいとの思いから、この10年間の青少年事業は夜明けの散歩やキャンプ、農業体験など、家族参加型の屋外での事業を主に開催してきました。また「地域の子ども達を地域で育てる」ために、教育現場からの意見が必要不可欠であると考え、学校関係者への協力を重点的に要請してきました。しかし、まだまだ十分な協力を得られるには至っていません。一方で、からつ地区の子ども達の学力の低下は著しいものがあります。これは学校教育における授業時間の短縮が大きな要因と考えますが、地域経済の低迷や、「地域の子ども達を地域で育てる」という意識の希薄化にも大きな一因があると考えます。これからの課題としては、家庭での勉強時間の確保やお年寄りを含めた小さなコミュニティでの教育などを発信し、更に進化したPTCA環境の構築を目指す必要があります。また事業構築においては、他団体や学校関係者、地域の大人達の意識調査をこれまでに以上に詳しく行い、どのような連携が可能なかを模索し続ける必要があります。

近年、停滞する社会状況において、子ども達に夢を与えるには何が必要でしょうか。まずは、我々地域の大人が、子ども達に対し大いなる期待を持ち、温かい眼差しで見守り、率先して未来を切り拓いて次代に託す覚悟があることをしっかりと示さなければなりません。そうすることで、子ども達は、未来が明るいものであることを知り、夢を持ち、それに向かって努力することの素晴らしさを感じることができるのです。そのために、引き続きPTCA環境の成熟に向けて、まずは日々の生活に追われている大人の意識を変革していく必要があります。

次代の核を担うべき我々青年世代が、率先して様々な地域団体や教育現場、行政に働きかけ、地域の大人としてお互いに気付きを与えあいながら、子ども達を見守り育てていくことにより、大人も子どもも夢溢れる、明るい豊かな「からつ」の創造に向かうことができるのです。この愛するふるさと「からつ」の発展と子ども達の明るい未来のために、我々はこれからの10年間、積極果敢に前進して参ります。

「からつ」に住む子ども達が、ふるさとを愛し誇りを持ち、未来への夢を描けるように。

ゆめのかたち

～国際社会との繋がり～

人と人の交流に重きを置きふるさと「からつ」が、我国の国際交流の発信源となるべく自らが率先して行動します。

「玄界灘に友情の架け橋を」をスローガンに諸先輩方の熱い想いのもと、1971年に唐津と大韓民国麗水の両J Cが姉妹J C締結を果たしました。その後、両J Cは国交正常化間もない両国を互いに行き来し、多くの困難にぶつかりながらも交流を続け相互理解を深めました。またその交流が発展し唐津市、麗水市の姉妹都市締結へと繋がりました。そして昨年、唐津J Cと麗水J Cは姉妹締結40周年を迎えることが出来ました。

互いの交流は姉妹締結後40年経った今も途絶えることなく続けられ、近年においては両市におけるメンバーによる民泊事業、スポーツ交流事業など様々な形で行われています。また本年は麗水市にて世界博覧会が開催され、姉妹J C締結当時のOBメンバーと現役メンバーで参加し、その際に40周年記念誌発刊式典が開催され、40年の歴史を振り返る良い機会となりました。我々は、この40年続いた交流を活かしJ Cメンバーだけでなく、今後もより多くの市民へ発信し続け、両国の交流の原動力となるべく活動を行わなければなりません。

近年、我が国の外交における近隣諸国との関係は、領土問題や歴史問題など決して順風満帆とは言えるものではありません。しかし国家間の問題によって、今日に至るまで続けてこられた人と人の繋がりを絶やすことは絶対にあってはなりません。先輩方は互いに理解しあう努力をされました。国と国では様々な問題があると思いますが、まず我々は人と人との交流を行い、個人間の対話の糸口をよりあわせて太い束とし、国家間の絆へと繋げていくことが必要です。そのことを広く市民に発信していくことが、我々唐津J Cメンバーの使命であると確信します。

我々のふるさと「からつ」は、古代より現在に至るまで大陸と多く関わってきました。日本最古級の稲作跡が見つかった菜畑遺跡、また文禄・慶長の役の際には肥前名護屋城が築城され、まさしく日本の玄関口として発展してきました。我々のふるさととは日本の歴史に深く関係しています。私たちJ Cメンバーには、アジアそして世界を肌で感じる事の出来る機会が大いにあります。J C I世界会議などの各大会や国際アカデミーなどの機会を活かし自らが率先し学び、「からつ」から国際交流の扉を開くため、市民と共に活動を行っていきます。

我々は40年の長きに亘り続いた麗水との姉妹交流をはじめ、国際交流をこれからも絶やすことなく永遠に続けていきます。

唐津J Cメンバー自らが次代を担うグローバルリーダーとなるよう次なる一步へ踏み出し、いつの日か、唐津J Cが恒久的世界平和確立に貢献できるよう、果敢に行動します。

ゆめのかたち

～共に活動する仲間たちへ～

「からつ」のためにリアリティと説得力のある能動的な行動ができ、地域や地域の人々から必要とされる人財（ひと）づくりに邁進します。

2002年当時、活動の源となる経済活動はバブル崩壊後の長きに亘る景気低迷の危機に直面していました。その状況を打破すべく、青年経済人として「企業活動を正しく行い利益を生み出すことは、社会への貢献である」を大前提とし、ビジネスセミナーやビジネスに関する講演会、例会時の企業PR等の様々な活動を行ってきました。

まちづくりでは、真の意味でふるさと「からつ」が「からつらしい」まちづくりを目指し、市民、企業、行政が一体となって行うグランドワーク手法の導入を不可欠と考え、会員自らが社会企業家としての意識の向上を図りました。行政や地域他団体との連携は、職務分掌による役割の遂行や、全国城下町シンポジウムで実践された「からつのまちとひと」に参画してもらう事業開催で、自らの社会的役割を確認しながら行動してきました。

2011年の未曾有の出来事が起きて以来、政治・経済ともに先行きの見えない混沌とした社会情勢の中で活動する我々は、ふるさと「からつ」を想い「からつを、佐賀を、九州を、そして日本を元気に」すべく決断を積み重ね、前進するための「ひとづくり」を目指します。

まずは、各々が経済人としてのスキルアップを行い、ビジネスネットワークを唐津JC内から確立します。そのネットワークを地域へと繋ぎ、強い想いを持って経済活動に邁進することで自らの礎となる企業を盤石のものとし、地域社会への貢献を果たしていきます。同時に、「まちづくりのできる」指導力の啓発を推進するためには、人柄だけではなく市民一人ひとりの幸せについて考え、話し合い行動していく経験を積み重ねる必要があります。その有効な手段の一つとして、出向制度やJCI・日本JCの持つプログラムの活用があります。我々はこれからも「まちづくりのできる」指導力の啓発を強く推進する中で、これらの励行が、人財を育み「ひと」という素晴らしい資源を生み出す可能性に繋がると確信します。

そして、各々が自らを律し、どう生きるのかを考える反面、社会に生かされていることを自覚し、何もしない自分を正当化せず自分の可能性を追い求め成長を諦めずに信じて行動しなければなりません。まずは、身近にいる両親や家族、従業員や関係する全ての人への感謝の心を持ち活動していきます。

さらに、未来に向け明るい豊かな社会を築きあげると同じ志をもつ仲間を増やさなければなりません。自ら率先して会員拡大を行うことこそが恒久的なJC運動であり、日々の我々の行動がJC運動の鏡であることを自覚し行動します。何よりもまず、自分自身が社会から、家族から、そして仲間から必要とされる存在になるよう行動します。

共に活動する仲間が、切磋琢磨し「ゆめのかたち」を現実にするべく活動していきます。

ゆめのかたち

～我々の全てを育む、ふるさとへ～

自分が生きる地域の宝、自然・歴史・文化・人々、すべてのものに感謝の心を持ち、市民一体となって夢を追う「からつ」のまちづくりを行います。

先の10年を振り返ると、我々が目指した魅力あるまちづくりとは、市民、NPO、市民活動団体、事業者等の多様な人々が主役となって、知恵と能力を合わせて行うまちづくりにありました。同時に、自分達のまちは、自分達の意志、判断で行動して創り上げるという主体性の根本となる「郷土愛」を育む事にも力を注ぎました。

結果この10年間で、まちづくりのあり方は変わりました。このまちを愛し、志高い市民による社会貢献への意欲向上を起因として、地域の課題を自発的に解決していこうという機運が広がり、市民と行政とが信頼と適切な役割分担による、パートナーシップに基づいたまちづくりが行われるようになりました。そして、その変化の一翼を担ってきたのが我々唐津JCであったと考えます。

さて現在、個人主義の横行、無感動・無関心型の成人が増加傾向にあり、未来の地域力低下が懸念されています。また、地方行政では抱える問題が複雑化し、地方行政レベルでは対応しきれない現状もあります。そもそも、地域コミュニティとは、そこに住むすべての住民の交流の上に成り立っている存在です。ならば、問題の解決もまずは地域で行うことが出来ないのでしょうか。この地域での問題解決能力、即ち「地域力」の向上が、我々の求めるまちづくりの大きな柱の一つとなります。昔から日本には「困った時はお互い様」という言葉があります。地域という身近な関係の中で、お互いが助け合って生活する事が、地域力向上の第一歩であると確信します。平時にあっては「我が地域は我々が創る」。非常時にあっては「我が地域は、我々が守る」。という市民の気概こそ、ふるさと「からつ」がこれから歩む道を切り拓いていくのです。無論、我々は市民の代わりに答えを出すことはありません。市民と共に、より効率的に答えを導き出すため、合いの手を入れることが重要です。そのようなまちづくりを展開していくためには、今まで通り個人・団体問わず多様な協力が必要なことは言うまでもありません。なぜならば、これから先もまちづくりの主役となるのは、このまちを心から愛する市民一人ひとりなのです。

地域を愛する心の奥底には必ず自己と他をつなぐ「おかげさま」という感謝の心が伴っています。コミュニティを形成する上で、これほど重要な感情はありません。そこに住むすべての住民の心がつながるまちづくりを胸に、我々はこれからの10年、前進して参ります。

夢は追うもの。希望は支えとなるもの。願いは叶えるもの。感謝の心で人がつながる明るい豊かな社会という夢を「からつ」の市民と一緒に追うために。